

ばってん

事務長会報第27号

平成22年3月31日

長崎県公立学校事務長会

長崎南高等学校内
〒850-0834 長崎市上小島4-13-1
電話 095-824-3134



ホテルモントール長崎
TEL 095-822-2251
長崎市筑後町4番10号



「新氣一転」

副会長(大村高等学校) 石橋 和 弘

現勤校へ勤務して、また何の因果か「役」を引き受ける羽目になってしまっただけで早一年が過ぎようとしている。さらには「ばってん」への寄稿もお願いされた。そこには断れない気の弱い自分がある。自己責任というか、もうこうなったら破れかぶれの心境である。

昨年は漢字一文字で表すと「新」であった。

「変わる」という意味合い、期待からであろうが、まだその方向性が不透明である。

今年の干支は「寅」、過去「寅年」の景気はあまり良くないそうだ。

来年の干支は「卯」である、ということは来年は私も年男である。

気がつく、年月がたつのは早いもので、今まで他人事だと思っていた「定年」の二文字がもうそこまでやって来て、残すところ二年余りとなってしまった。

自分の中では、まだまだ気持ちは若いつもりでいても年齢だけはどうしてもない。

確かに、事務長名簿にはすでに私が可愛がってもらった(?)事務長の名前が無かったり、今年で退職とかいう現実を突きつけられ少し寂しい気持ちにもなる。

今思えば、そういった先輩方と知り合った頃は、まだまだ職場も仕事も人も良い意味でのんびりしていたところがあったような気がして懐かしさを覚える。ある意味個性のある人が多かったというか、豪傑がおられたように感じる。

誤解がないように言わせてもらえば、仕事をするときは、遊ぶときは遊ぶで何かメリハリがあったような気がして、もう少しゆとりがあったのかなと思う。しかし懐古になるこの症状自体が年齢相応なのかも知れない。

先日、テレビのトーク番組を見ていたら、出演していた優良企業の複数の経営者がこの不況下でもアイデア(やり方)次第で十分活路は見えてくるし、ピンチはチャンスとして捉えることが出来るという話をしていた。【逆転の発想】

その中の一人は、不況というのは最初からそれありきで考えるべきで、それを理由に業績が上がらない、経営が難しいことの言い訳には出来ないし、当然それを前提としてどうしたら業績が上がるかを考えるべきであり、アイデア

を出すべきだという話をしていた。

果たして、学校は利益追求の職場でもなければ業務内容でもないが、我々はこの厳しい財政状況の中、費用対効果、説明責任等県民目線での業務遂行が求められている。そういった中で、いかに魅力ある学校づくり、学校経営に取り組んでいくかが課題であり、またやりがいを持ってモチベーションを保って業務を遂行できるかが大きなテーマでもある。一方で、メンタルヘルスも含め健康管理も今後懸念されるところである。

最近、事務長会の研究協議テーマは我々を取り巻く環境、置かれている状況を反映してか、「人材育成」とか「後継者育成」とか「学校経営にどう関わるか」という題材が目につく。

基本的に、人材育成とか後継者育成の「マニュアル」は無いと考える。要は、本人のいろんな意味での積極性、いわゆるやる気(意欲)と手本となる人材(職場を含めたまわりの環境)に負うところが大きいように感じられる。本人がどう変わっていきけるかが鍵だと思う。

『心が変われば行動が変わる 行動が変われば習慣が変わる 習慣が変われば人格が変わる 人格が変われば人生が変わる』

これは、アメリカ大リーグで活躍する松井秀喜選手を育てた、石川県の母校野球部監督の言葉である。

また、今年のNHK大河ドラマは「龍馬伝」である。福山雅治演ずるところの幕末の風雲児坂本龍馬はどんな龍馬像になるのだろう。一昨年の「篤姫」、昨年の「天地人」に負けないようなドラマ人気と、颯爽とした龍馬になりきって、この混沌としたまた不透明な世相に一筋の光明と我々の心に夢を与えて欲しいと願う。

されど、かくいう私はというと、この文章を考えつつ「龍馬伝」という焼酎を飲みながら、坂本龍馬に己の姿を写して英雄の夢を見ている、単なるおっさんである。

あるもうひとつの「されど われらが日々」

～ 後継者育成を託して ～

佐世保西高等学校 井 手 敬 治

14年位前に、筑波の事務職員幹部研修会に行かせてもらえる機会があった。4泊5日の研修だったか、法規集等必要なものはあらかじめ宅配便で宿泊所に送付して身軽に出発した。全国の事務職員（事務長）が集まって研修を受ける場である。事務長になって4年目のときである。内容は法規がメインであったが今はどんなことを研修したかほとんど忘れてしまっている。ただその研修の中で、「学校における団体費について」の協議内容だけは覚えている。なぜ筑波の研修に私費会計の協議題が設定されたのか、その当時は疑問であった。

が、全国的に少子化の影響で、生徒数の減少に伴い団体費（PTA会費等）についてどう対応するかという、直接の公費の話でなく私費の在り方の話であった。当時、多くの県は学校運営費は団体費の比重が大きいとの話で、長崎県とは違って、団体費の直接的な経費が学校運営に相当比重を占めている、とそのとき初めて知った。

その研修は、全国公立学校事務職員協会の役員が講師を務めていた。なぜ私費会計がテーマになったのかわからなかった。学校の経費は当然設置者である地方公共団体が予算措置をすべきものであるはずだが……。現在は、参加費・資料代等私費で出していたものについても県費で支出している県が多くなってきていると思う。それは2年前、全国普通科校長会が長崎市で開催された時、勤務校が事務局であり事務局長として会計担当に携わった際、他県の参加校の事務室等から電話があり、これらの経費を公費で出すための手続きに対応してきたからである。

時代は変わったのであり、これが正常なことであると思うが、窮屈であることは否めない。「説明責任」、「保護者負担軽減」と言われている中でも、なかなか教員は理解できないでいる。受益者負担は当然としても、生徒（保護者）が負担すべきもの、そうでないものを区別する必要は

ある。

その研修は、夜の研修が楽しいものだった。各地の地酒を持ち寄り談話室で夜中の2時過ぎまで語りあったものだ。参加者のメンバーは学校出身がほとんどであったが、学校事務職員採用ではなく他の分野（知事部局の水産部、土木事務所、保健所、動物園の園長）からの異動者もあり、その人たちが事務長となり、また学校現場から去って元へ戻っていく人も多くいたと記憶している。

「後継者の育成」その言葉が頭をよぎったのはそのときだった。やはり現場から後継者を育て、事務長として出す。それが自分の事務長としての仕事だと。幸いにも同じ時代いっしょに勤めた事務長さんが現在5人いる（他にひとり家庭の都合で途中退職）。もちろん本人たちの努力の結果であることは間違いない。それらの事務長さんにもそのことを是非お願いしたいと思う。

全国大会、九州大会規模の研修会参加者が以前より減少してきているといわれるこの頃、他県の事務職員との交流の場としてこの研修はいつまでも残して欲しいものである。

事務長として内示を受け当時の遠回りの九州商船のフェリーに揺られ5時間、さらに陸路1時間半、やっと奈良尾へ夜の7時半到着。18年前、ここから始まった。以来、たくさんの方々にお世話になった。ただ事務長を長くしただけなのかもしれない。これまで何もやれなかったことを深く反省している。

ゆっくり桜を観たいと常々思っていた。それが実現するか否か。

また、柴田翔の「されど われらが日々」を読み返したいと思う。

お世話になりました。

「学ぶこと」と「習うこと」

鳴滝高等学校 岩 村 知 康

人生には、時として思いもよらないこととの出会いがある。10年前になるが、高校時代の恩師から「短歌作り」を勧められた。その先生の歌集出版のお祝いの会を同級生3人で開いた席であった。酒席とはいえ、作ってみようと手を挙げたことを後悔することになる。全くの初心者にとって、歌作りは生易しいものではなかった。

しかし、難しくて作れませんと挫折する訳にはいかず、現在も続いているが、この過程で学んだことを振り返ってみたい。

○「上達法」などを読むよりも実作を

「短歌入門」や「短歌教室」などのいわゆる手引書的なものを読んで、歌作りの参考にしようとしたが、初心時にはほとんど理解できなかった。それよりも、古今の著名な

歌人の歌集などを、繰り返し読んだ方がいいと教えられ、実践しながら少しずつ歌作りが進んだ。

○添削指導の結果に落ち込まない

先生の指導を受けるのは、対面でなくもっぱら作品を投稿して添削を受ける方法である。作品が原形をとどめないほど添削されて返送されれば、悔しくて下手な作品と分かっていても落ち込んでしまう。この繰り返しが数年間続くことになるが、今振り返ると、落ち込む暇があれば、その時間もしっかり勉強すべきであった。

○「まねび」、「倣い」ながら作る

「学ぶ」という語は、まねをする意の古語「まねぶ」から出たと言われる。また、「倣う」は、すでにある物事をまねてそのとおりにする。手本としてまねる。「習う」と同語源とある。（大修館「明鏡国語辞典」）

初心時に、先生から斎藤茂吉や伊藤左千夫などの作品を、繰り返し読むように指導されたのは、それらの作品を手本にして「学ぶこと」、「習うこと」の勧めであった。

○職務における「学び」と「習い」

事務職員として採用されてからこれまで、学び、習うことの連続であった。手引書を読んでも理解できずに仕事が進まなかった初任時代。また、仕事の間違いを上司から指摘されて落ち込んだこともあった。さらに、仕事の上での手本となる同僚や先輩と出会い、指導を受けながら実践してきて今日の自分があると思っている。

歌作りも事務職員の職務も、優れた手本などに学び、習って実践することでは共通しており、しっかり「学ぶこと」と「習うこと」の大事さを実感している。

ところで、30数年の勤務の中で、自分自身、周囲の職員や後輩に職務の上で「学び」、「習い」の手本となる事例を、どれだけ示すことができたろうか。

ウチのここがすばらしい 「豊玉姫の町」

豊玉高等学校 田川 正 則

勤めて2校目に「対馬高校」、8校目が「豊玉高校」で、二度目の対馬勤務となりました。23年の空白期間中に、いくつかトンネルができ、道路はきれいになり、交通事情はとてもよくなっています。しかし島内では人口の減少によって、各学校でも生徒が少なくなり、商店街もだいぶ寂しくなっています。

豊玉高校は、対馬高校定時制分校として昭和25年に設立され、昭和39年には全日制分校に切り替え、48年に独立しました。今年で創立37年、卒業生も分校時代を合わせて4,196名となります。

校訓は「恕」「和衷協同」「切磋琢磨」で、独立時に初代校長塚本心一先生が制定しました。

じょ……………思いやりの心を持ち
わちゅうきょうどう…仲よく力を出し合い
せつさたくま……………お互いを磨き上げよう

校章は神木と尊ばれ、英知の象徴である銀杏です。三枚の銀杏の葉は対馬を表し、その中央に玉を配しています。ちなみに対馬北部の東海岸の「琴」というところに



校 章



(琴の大銀杏)

推定樹齢1,500年、日本最古のイチョウといわれる。
胸高直径 12.5mで全国第2位

は、大イチョウがあります。何度か行きましたが、実に見事なものです。

校歌は作詞宋武志氏（対馬宗家第36代当主）、作曲は平井康三郎氏（「とんぼのめがね」などの作曲者）で、とても柔らかな歌いやすい曲です。文化祭では、全校生徒で三部合唱を行い、来校者から絶賛されました。

学校の作りはコンパクト。余分なものがなく、管理がとてもしやすい建物です。職員は若手が多くフットワークが軽快で、何事にもスムーズに対応してくれます。

さらに、地元出身で本校の卒業生である職員がおり、地域との関係もうまくいっており、対外的な問題はほとんどありません。

職員住宅は4カ所に分散していますが、すべて学校周辺の徒歩10分の圏内にあり、平地ですので通勤も楽々です。

近くには海幸山幸（うみさちやまさち）の神話で有名な彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）と、町名の由来となった豊玉姫命（とよたまひめのみこと）を祭る和多都美神社、浅茅湾を一望できる烏帽子岳があり、仁位港からは「ニューとよたま」という市営渡海船が運航されています。

県立高校として最高の特地4級ではありますが、生活に必要な銀行・郵便局・スーパー（2店舗）・本屋なども徒歩圏内にあります。自然にも恵まれ、地元の方も楽しい方が多く、冬の寒さがやや厳しいのが難点ですが、とても生活のしやすい町です。



(校舎全景)



(浅茅湾の夕日)

渡海船にて撮影
船は仁位～美津島間を毎日
2往復運航
片道約90分、運賃940円

随 想 新 しい 革 袋

長崎県教育センター所長

法 澤 嘉 夫

平成22年3月末をもって15名の事務長さんが定年により職場を後にされました。40年近くの永きに渡り学校運営を支え続けてこられた先輩諸氏の御労苦に心から敬意を表したいと思います。

この先輩の皆さんの中には、私が初任地で教えを請うた方、教育庁で予算の初歩から御教示いただいた方、行政職員の有り様を身をもって示して下さった方もおられました。

20代の当時は、先輩方とともに徹夜で仕事をしたことも一度や二度ではありません。みんな若かったなと思います。そんな私も、もうすぐ職場を去る時を迎えようとしています。振り返ると「一炊の夢」のような思いがいたします。

私がこの職に就いた当時は、オイルショックから程無い、厳しい就職難の時代でした。希望の職業に就けず、たまたま学校事務職員として、「腰掛け」のつもりで仕事を始めた私でしたが、学校事務という仕事は、その幅広さや奥深さを垣間見てしまうと、「腰掛け」で全うできるほど、なまやさしいものではありませんでした。まるで、中途半端な自分が「仕事」から笑われているような気がしたものでした。

そんな時に、仕事に向き合う姿勢を私に教えてくれた先輩が何人もおられました。私が教えられたこと、それは一言で言えば、「職業とは、自分の生き方を映す鏡のようなものだ」ということでした。全力でぶつかっていかねば「生きている実感」が得られないのでした。それ以来、腰掛け気分や迷いが消えたように思います。無我夢

中で、気が付くとこの歳になっていたのです。

振り返ってみると、私はいつも退職された先輩方の後ろ姿を追いつけていたような気がします。いつまでたっても追い越すことができない背中ではありましたが、常に私には目指すべき道標があったことに感謝の気持ちで一杯です。

さて、私たちは今「変化の時代」を生きています。昨年の政権交代のキャッチコピーの一つに「コンクリートから人へ」がありました。価値観の転換です。今、新たな価値観のもとに様々な制度改革が現実のものになろうとしています。教育分野も然りです。これから数年間の社会・経済の変容は、後になって振り返ると、歴史上大きな意味を持つことになるかも知れません。私たちは今、歴史の「曲がり角」に立っているかも知れないのです。

折しも、この3年間で事務長さん方の半数以上が退職されたとのこと。世代交代が進んでいるのです。激しい変革の時代には、新しい事務長さんや若い世代の事務職員のみなさんの瑞々しい感性が何より求められるように思います。

新約聖書に「新しい酒は新しい革袋に盛れ」という言葉があります。新たな価値観・新たな制度には、それに柔軟に対応できる新たな体制がふさわしいのではないのでしょうか。

今年事務長に就任された方々には、子どもたちのために、立ち止まることなく、常に前へ歩み続ける気概を持った事務長になっていただきたいと思います。これからの時代の風に立ち向かう新任事務長さんたちの御健闘を心から祈りながら筆を置くことといたします。



編 集 後 記

前号の事務長会広報誌

「ばってん」の編集後記を書き終えたばかりと思っておりましたら、もう今号の締切ですよ！と編集長にお尻をたたかれました。

事務室の一番奥の席に座っている「私」は、ここ数年、月日が経つのは早いものだと実感しておりましたが、本当に半年、一年経つのは早いんですね。会員の皆さんは如何ですか。

今回も原稿依頼は、若いけどベテランのu kの事務長さんがテキパキとこなされ、残るは「編集後記」のみという状況になってしまいました。申し訳なく思いつつ、頑張っております。

本号では、この春めでたく御勇退される事務長さん方に執筆をお願いいたしましたところ、快くお引き受けいただきました。永年の勤務経験に裏付けされた貴重なお話や、大所高所からの見識あるお話をいただき、本当にありがとうございました。最後の最後まで「ばってん」のために時間を割いていただき、本当に申し訳ありませんでした。感

謝いたしております。

また、新進気鋭の事務長さんにも素晴らしい寄稿をいただき感謝申し上げます。

ところで、御勇退される事務長さん方、最後の卒業式は如何でしたか？今まで以上に感慨深かったのではないのでしょうか。また、新しく事務長さんになられた方々は初めての卒業式は如何でしたでしょうか。私もまた不覚にも泣かされてしまいました。

最後になりましたが、今回、本当にお忙しい中、本号への寄稿を快くお引き受けいただいた教育センターの法澤所長さん、行政職員の有り様や事務職員としての心構えなど、柔軟な対応が必要というお話。本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

では、この後記がu kの事務長さんの検閲を無事通過できることを祈って、今回はかつてルーブル美術館で観た「ミロのヴィーナス」の背中を載せて終わりにします。T a k a

